

わたしの戦争体験

大澤 貢

弥生町六丁目

戦争とは、本来個人的には何の恨みも憎しみもない者同士が殺し合い傷つけ合うといったその愚かしい行為の結果は、過去の歴史や最近の中東戦争でも見た通り、戦後に残ったものは憎悪と飢えと荒廃した町の瓦礫の中で、うつろな表情で途方にくれている被災孤児と難民の悲惨な姿でしかない。全く愚かな行為の極みである。

私も二一歳から七年間北支にフィリピンにと、人生で最も大切な時期を無駄に過ごして来た一人である。尚、これはことぶき大学在学中に書いた、自分史（未出版）の中のフィリピンに於ける実践記録の一部分である。

敵上陸開始

バザックの激闘

「二〇年三月二六日午前九時、フィリピン・セブ島に新たな敵一個師団が上陸、防衛軍は目下戦闘中なり」。これは内地に於ける大本営の発表である。

この時私はセブ市西方山系の快勝山楠陣地にいた。この日私

は朝五時半頃目覚めて、山頂の幕舎を出た。外は薄明るかったけれど、霧が深く立ち込めていて視界はゼロに近かった。パイヤの木立に立って深呼吸している内に、徐々にではあるが霧は薄らいできた。体操の手を休めて、なに気なしに眼下のセブ市を通して海に目を転じると、なんと見慣れぬ艦艇が二〇隻ばかり並んでいるのが目に映った。急ぎ幕舎に戻り双眼鏡で確かめると、正しく米海軍の上陸用艦艇である。一瞬ではあったが心の高まりを覚えた。然しいよいよ来たかとの決心に変わった。午前七時きっかりに米軍の空海両面の一斉攻撃が始まった。

タリサイ海岸線に対する艦砲射撃、そして空よりはグラマン機による波状攻撃で、それまでは静かであったセブ市街は一瞬にして地獄と化した。両軍の激戦は夕刻まで続き、双方共に相当の被害を出して第一日目は暮れた。

我方の人的被害は、最初に高橋少尉の戦死に続いて宮原曹長が戦死し、時を追うにしたがって林少尉、高山中尉、小田中尉、浜崎准尉と主だった将校が次々と戦死した。

当然のことながら兵達もトーチカの内にも外に屍を重ねていった。

戦場の実体は余りにも悲惨である。なぜに憎しみもなき者同士が死闘を繰返さねばならないのか。地球上に於ける最大の不幸であり、最大に無駄なことである。

斬込み隊

ある伍長の死

二〇年四月十八日払暁、セブ市西方快勝山楠陣地の奪回作戦である。

我が分隊は命令により四月十八日払暁を期して第三回目の斬込みを行うべく人選中、永田伍長が私のところへ来て、今回は是非参加させて欲しいと申し出て来た。私は危険だし、それに実戦不足を理由に受け入れなかった。ところが夜半の出発直前になって、再び本人から参加希望の申し出があった。私はその時の周囲の状況と本人の心情や立場を考慮して止むなく申し出を承認して、人員交替の上目的地向い出発した。この作戦は前にも書いた通り、月暗時を利用しての楠陣地奪回の為の斬込みで、手順通り全員が山頂に向い匍匐前進を開始する。静かに接近し頭上で敵の話し声が聞こえる所まで来た時、誰かが誤って敵の架設した鳴子式電線に接触した為に、警戒電鈴が全山に鳴り響いてしまった。

同時に敵のカルバイン自動小銃の一斉射撃を受け、全く身動

き出来ぬ程の乱射であった。どの位の時間であったのか結局この作戦は失敗に終わった次第です。機を見て我が分隊も退却を開始した。その時永田伍長は、私の左側二メートル位離れた岩の陰に居たのは確認できた。

だがその後山裾での集合地点に於いての点呼の結果、永田伍長以下五名の未帰還者を確認するにいたった。

尚今でも印象に残るのは、出発直前の永田伍長の鉄帽の中から「お香」のかおりが漂っていたことである。今まで何処へ保管していたのであろうか。それと死を予期しての行為であったのであろうか。

たった一枚の赤紙で南海の山野に散った若き命。唯々合掌するのみである。

玉砕か!! 転進か!!

快勝山に対する攻撃は日を追って益々熾烈を極めて来た。別けても楠陣地は全陣地の喉首に当り、快勝山の生命線であった。この陣地の攻防こそ勝敗を決する鍵なのである。

そこを守る中隊は三度全滅、三度占領され、そして三度これを奪回した。艦砲射撃と戦車砲と空爆の為、楠陣地の様相は文字通り一変した。

米軍の一個師団の主力と空軍と駆逐艦との立体攻撃をこの陣地一点に集中して来たのである。守るは僅か一個中隊のみ。この陣地を中心に一か月以上の戦闘が続いているが、衆寡敵せず、

遂に四月二十九日米軍はここを突破したのである。日没までの戦鬪で菊陣地の第四中隊が全滅して、残るは我が第二中隊と第五中隊の二個中隊のみとなった。たとえ再び楠陣地を奪回しても、最早守り抜く兵力はなかった。その日の夕刻、今夜二四時を期して総攻撃に出て全員玉碎すべしとの命令を受領した。

当初二〇数名いた我分隊の生存者も、今では六名を数えるのみである。そこで、もう射つ機会もないであろう愛用の重機関銃は分解して谷間に投げ込んだ。軍票やその他の書類は裏地の藪で焼却して、四月二十九日の二四時を待った。

静寂の中に刻々と迫る死への時間。この時私の脳裡をよぎったのは、今までに失った部下のことに、いっどこでどんな死に方をするのであろうかといったことであつたが、月光下の塹壕の中でお互い手を握り、又は肩を組んでその時を待つ表情は以外に冷静にみえるが、果たしてそうであらうか。ある者は、故郷で我が子の無事帰還を祈りながら腰を曲げて農業にいそむ老いた母の姿か、又は涙を堪えて別れて来た妻や幼い子供の面影か。だが全員間違いなく来る死を待つ表情には恐怖はなかった。それとも戦場という特定の場所、連日悲惨極まりない地獄を見てきて平常心を失っているせいか、又は死ぬことを当然と考えている為なのか、あくまで冷静な表情であつた。

すると二三時少し前に、生存者は兵器と食糧(トウモロコシ)を持って快勝山山麓の椰子林に集合せよとの命令が来た。一瞬

なに事かと思つたが、とにかく命令である。当初快勝山陣地に入つた時には一五〇〇名を越えていた兵力であつたが、山麓の教会付近の椰子林に集合した人員は僅か二〇〇名足らずであつた。

その日は奇しくも天長節の夜であつた。玉碎するか又は北方の防衛軍主力と合流して再び決戦するかで討議した結果、天主山にいる主力と合流して決戦をすることになった。よつて、敵を警戒しながら北への行軍は続いた。

夜は急峻な山を縫い、昼は密林を抜けて主力陣地への三日三晩の強行軍であつた。

だがここに信じられない事が起こつていた。それは一万余の兵力で戦っている筈の主力陣地の様子である。退却した陣地跡には、米軍と戦鬪を交えた様子が全くないのである。これは終戦後知り得たことだが、米軍が上陸した翌日、ピサヤ地区の第一線陣地に敵の重戦車が攻撃して来た時、これを見た第一線の防衛兵達は驚いて我先にと陣地を捨てて逃げ出したのである。だがこれには事情があつた。

先頃のレイテ島決戦を敗戦に導いた福江師団長と参謀長が、セブ島防衛司令官に退却を進言した為に、最高責任者たる司令官達は部下を見捨てて何処かへ行つてしまった。あとに残された兵達も冗談じゃないとばかり前線を離脱したのである。

日頃は口髭に泡をとばして連日部下達に死守を命じていた日

本軍の司令官や師団長、参謀長の実体である。勿論これは一部ではあるが。思えば今まで悪戦苦闘の末、最後の死場所として主陣地へ主陣地へと張り切つてやつと辿り着いたのに、そこに待っていたものは廃墟と化した陣地跡と、無心に咲いている撫子なごと、朝風にそよいでいる薄すすきだけであつた。

その現状に呆然として且つ怒りを我慢していた兵達も、悲憤の涙に変わり、お互いの肩を抱き合つて泣いた。天主山の頂は全く何も無かつたように相変らず涼やかな風に薄がそよいでいた。

四〇日近い激戦に疲れ切つた兵達はよく眠っている。決戦をすべく来た主陣地が蛻もみぢの殻では仕方なく、セブ島の中央山系を直指して南下することになった。案内人は配属の憲兵にフィリピン人の密偵が三名いたので、彼等の案内により払曉に出発して途中いろいろ苦勞はあつたが、それでも無事に第一地点たるジャングルに辿り着くことが出来た。食料は途中の畑からトウモロコシを採つて来たが、密林は何か底知れぬ不気味さを肌で感じた。ここに二〇日ばかり潜んでいたが、密偵の報告でここに危険の迫つていことが分かつた。よつて南下すべく準備を整えて夜を待ち、密林を出発した。

途中の溪谷には主陣地を離脱した兵達の戦傷や栄養失調、その他マラリア、 Dengue 熱等で自力での行動が不可能になり、ついに病死又は自決により密林に屍を重ねている地獄谷や、又は動けぬ負傷者を錦蛇が襲うといった目を覆うばかりの悲惨な、

まるで地獄絵を見るような情景もあるが、自分達自身も食料はおろか食塩の不足から、一寸の落差にもよろけるといったように疲労困憊が激しく、とても救助に手を差し延べる気力とてなく、鎖に繋がれているような重たい足を引きずりながら、当てのない中央山系に向かつて南下を続けるだけである。(以下略)

これはフィリピンに於ける一戦局面であるが、戦争は広島・長崎をはじめ、その他の人的、物的、精神的に蒙る有形無形の損失は計り知れないものがある。宗教・文化の違いはあるだろうが、全人類よ心せよ。